

指導技術を高める



Point 1 板書と教具の工夫 ～理解を助ける～

特別支援教育の視点から

授業の中のたくさんの情報に優先順位を付けたりまとめたりして、重要なキーワードや内容がまとまった形で視覚情報として提供される板書は、記憶しておくことができにくい子どもにとって、大きな手がかりとなります。また、授業の内容に興味を持ちにくい子どもを引き付ける工夫をすることは、ほとんどの子どもの学習意欲を向上させることにもつながります。その一つが教具です。具体的操作や視覚情報は理解を助けます。

●授業の流れが分かる板書●

子どもの思考の道筋を示すものとして、本時の学習の経過が分かるような板書を心掛けたいものです。チョークの色は、一定のルールを持って使い分けます。また、カード、図、表、意見ボードなどを活用して、板書を効果的に整理することが必要です。板書の構造化は、子どもへの効果的なノート指導にもつながります。

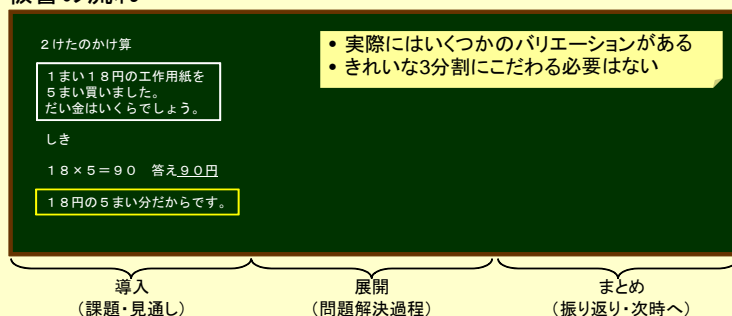
●意欲を引き出す教具の工夫●

理解に時間がかかる子どもにとっては、具体物を実際に操作することが効果的です。また視聴覚機器を活用し、絵や写真、動画などを見せることによって、さらに理解を深めることができます。



具体物を操作している様子

板書の流れ



白墨(チョーク)の使い方

- | | | |
|----------|--|-------------|
| 文字・記号・囲み | | 計算のしかたを考えよう |
| 文字・記号・囲み | | 計算のしかたを考えよう |
| 記号・囲み | | 計算のしかたを考えよう |
| なるべく使わない | | 計算のしかたを考えよう |
| なるべく使わない | | 計算のしかたを考えよう |

国立教育政策研究所初等中等教育研究部研究員 山森 光陽先生
「平成21年度中丹地方教職員研修大会講演資料より」

Point 2 分かりやすい指示・発問～主体的に学習に向かわせる～

特別支援教育の視点から

語尾や内容が曖昧な指示は、文脈や状況に応じた言葉の理解がしにくい子どもにとって非常に分かりづらく、勘違いをさせてしまうことになりかねません。分かりやすく言い切る指示は、どの子どもにも伝わりやすい指示の出し方です。

聴覚保持が苦手な子どもたちにとって、言葉だけの指示・発問はすぐに消えてしまいます。大事な指示・発問は、視覚情報も合わせて提示することが必要です。

教員の指示や発問が的確であれば、子どもたちは授業に主体的に参加することができます。教員の声に注意を向ける習慣を付けるためには、子どもたちが「教員の指示や発問をよく聞いておくと授業が楽しくなる」という実感を積み重ねることが大切です。

聴覚保持・・・耳からの情報を記憶しておく力

●短く具体的な指示●

- ・ 全員が注目していることを確認する。
- ・ 短く区切って、一つずつ具体的な言葉で言い切る。
- ・ 言葉だけでなく、板書や絵や図など視覚情報も合わせて活用し、指示内容を分かりやすくする。
- ・ 複数の指示を出す場合は、初めに「今から3つのことを言います」というように、子どもたちが見通しを持って指示を聞けるような話し方を心掛ける。
- ・ 語調にも変化を付ける。

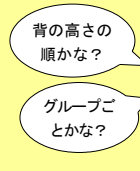


< 分かりやすい指示の例 >
「名簿の順に、廊下に並んで待ちましょう」



名簿順だから、
〇〇さんの後ろだな！

< 分かりづらい指示の例 >
「いつものように、並んで待ちましょう」



背の高さの
順かな？

グループご
とかな？



名簿の順
かな？

どこに並
ぶの？

●吟味された発問●

発問は、子どもたちの多様な考えを引き出すため、十分に吟味する必要があります。

重要な発問はカードなどを活用し、いつでも見て確認できるようにしておくことが大切です。発問のあとは間を取り、子どもたちに考える時間を与えます。

Point 3 効果的な言葉かけ ～意欲を引き出す～

特別支援教育の視点から

状況に合わせた言葉の解釈がしにくい子どもには、タイミングよく具体的なほめ言葉や注意の言葉をかけないと、何をほめられたのか、何がいけなかったのか分からず、次の行動につながりません。

教員の語調や語気の変化は、子どもへの注意喚起を促します。そして、何よりも大好きな先生に認めてもらえる場面が多ければ多いほど、子どもは、自信と意欲を持って学習活動に取り組みます。

効果的な言葉かけは、信頼関係を築く基盤になります。

●机間指導●

どの順番で机間指導にあたるか、どんな言葉をかけるか意図的に行うことが大切です。「個別の指示が必要な子には、まずそばに行って指示を与える」、「思いを伝えるのが苦手な子には、安心できる言葉をかける」など、子どもの実態を把握した上で必要な支援を行います。

また、次の活動でどの子を指名するかなどの個を生かす視点を持って机間指導にあたることも大切です。



目線を合わせて個別指導にあたっています

●評価する場面●

身に付けてほしい行動やよかったことについて、例えば、「背中が伸びていい姿勢だね」「字を丁寧に書いているね」など、子どもが何をほめられているかが分かるように、具体的にタイミングよくほめます。

●表情と語調●

「ほめるときは、にこやかに喜んだ顔で伝えるようにする」それが、子どもの安心感、自己肯定感につながります。言語で伝わることは30%、表情などで伝わることは70%と言われます。子どもの前に立ったときのまなざしは、教師の心を映す鏡なのです。

また、声の大きさ、抑揚、スピードの変化等により伝わり方が変わります。全体的に落ち着いた雰囲気をつくるためには、トーンを抑え気味にした語りかけが効果的です。



個を生かす視点でどの子どもにも活躍の場が必要です